

ご協力いただいた乾癬の患者さんへ

# 研究報告 2019-2020

NPO 法人西日本炎症性皮膚疾患研究会

---



*photo by Shinichi*

## 1,003名の方にご協力いただきました

医師が中心となって複数の施設で行う乾癬の大規模な観察研究として、2019年8月から調査を開始し、2020年4月までに1,003名の患者さんにご協力をいただきました。

誠にありがとうございました。今回は、下記の報告をさせていただきます。

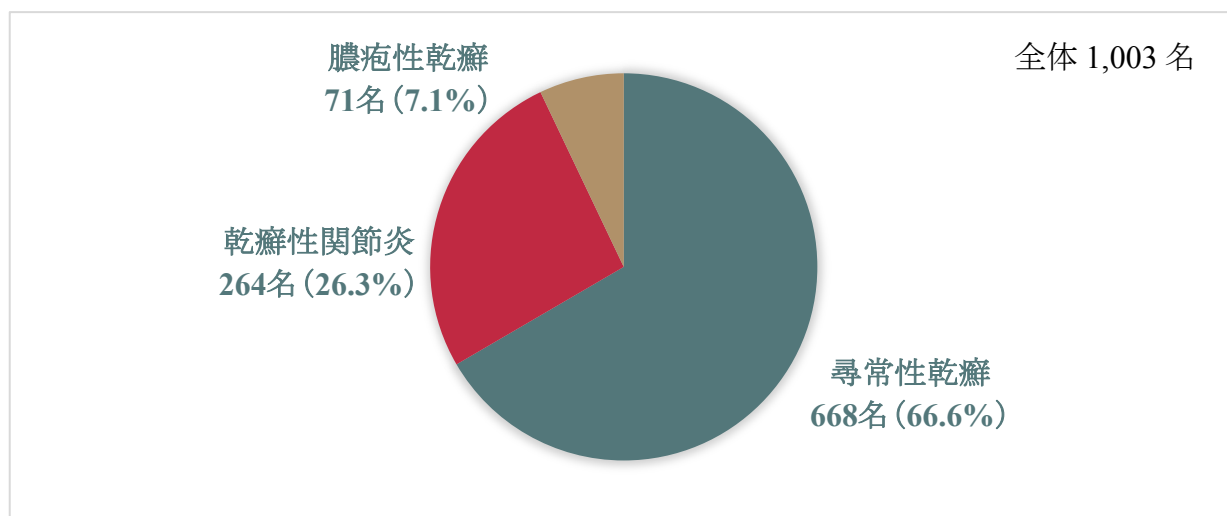
このデータが皆さんの乾癬治療のヒントになれば幸いです。

- 皆さんの乾癬の病型(タイプ)について
- 皆さんが現在行なっている治療の内容について

## 年1回の継続調査(アンケート)にもぜひご協力ください

現在の乾癬の病状や、治療の内容についてお尋ねいたします。

## 乾癬の病型(タイプ)



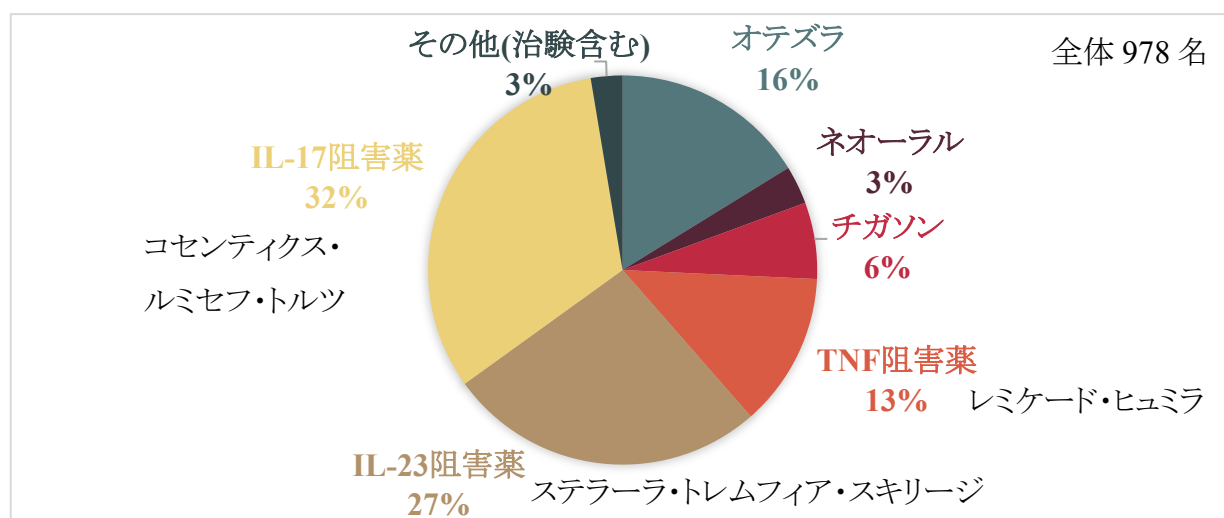
乾癬に関節の痛みを伴う乾癬性関節炎の患者さんが多く見られました(他調査では 15%)。理由としては、今回の研究には大学病院や総合病院に通院している方や全身治療をしている方に多くご協力いただいたことが挙げられると思います。

過去の調査では、尋常性乾癬にかかってから7、8年で関節炎が出る人が多いと言われています。継続アンケートにある J-EARP 質問票は、乾癬性関節炎の早期発見に有用です。3つ以上当てはまる時には主治医にご相談ください。

- ① 関節に痛みがありますか？
- ② この3か月の間に週2回以上、関節痛で痛み止めを飲んだことはありますか？
- ③ 腰痛で睡眠中(寝ている間)に起きることはありますか？
- ④ 朝起きてから30分以上、手指のこわばりを感じますか？
- ⑤ 手首や手指が痛みますか？
- ⑥ 手首や手指が腫(は)れていますか？
- ⑦ 手指が3日以上痛かったり、腫れたりしますか？
- ⑧ アキレス腱(けん)が腫れていますか？
- ⑨ 足先や足の裏、踵に痛みはありますか？
- ⑩ 肘(ひじ)やおしりが痛みますか？

**J-EARP 質問票**  
3つ以上で乾癬性関節炎の可能性  
が高いとされています。

## 現在の乾癬の全身治療(内服治療、注射・点滴治療)



乾癬の全身治療(内服・注射・点滴治療)を行っている方は 978 名でした。薬剤別では、2017 年に発売された内服薬のオテズラが最も多く、次に生物学的製剤であるコセンティクス(IL-17 阻害薬)が使用されていました。

生物学的製剤は昨年末に TNF 阻害薬のシムジアが加わり、近日中に IL-23 阻害薬のイルミアが発売予定です。これで乾癬に使用できる生物学的製剤は 10 剤となります。標的となるサイトカイン(炎症性タンパク質)別にクラスが分かれていますが、それぞれの薬剤で投与方法(皮下注射か点滴か)や投与間隔(維持期は 2 週から 12 週)が異なり、皮膚症状・関節症状への有効性や持続性、副作用なども少し違ってきます。内服薬も含めて、選択肢が増えてきた乾癬治療。主治医とよく相談して、あなたの症状、ライフスタイルに合った薬剤を選んでください。

～コラム～

### 在宅自己注射をご存知ですか？



新型コロナウイルス感染症の流行もあり、通院の頻度を減らしたい方が増えています。投与間隔が 4 週以内の生物学的製剤では、2～3 ヶ月分をまとめて処方し、自宅で自分もしくは家族が注射をすることができます。外来で 2 回程度練習が必要です。

ゆっくりした時間帯に自分のペースで打つことができるのもいいね。わたしの場合はまとめ処方で高額療養費制度が利用できるようになって自己負担が下がったよ。



～理事長よりメッセージ～

## 新型コロナウイルス感染症と乾癬治療について

皆さん、こんにちは。研究会の理事長の今福です。新型コロナウイルス感染症の流行が続いており、乾癬治療中の皆さんは不安な毎日をお過ごしだと思います。

今回は、新型コロナウイルス感染症と乾癬治療についてわかってきたこととお話したいと思います。新型コロナウイルス感染症は高齢者、肥満、併存症（高血圧や糖尿病など）がある、男性が重症になりやすいとされています。乾癬患者さんは男性が7割、肥満や併存症がある方も多いからです、3密を避ける、手洗いをするなど予防に努めていきたいと思っています。最近の研究では、肥満は慢性的な炎症状態であり、炎症を強く起こしやすい性質につながると考えられています。肥満がある方は、乾癬も新型コロナウイルス感染症も悪くなりやすいのです。適度な運動と食事の調整でのダイエットをお勧めします。

乾癬の治療については、当初は生物学的製剤は免疫抑制薬なので感染症にはよくないと考えられていました。しかし、その後、乾癬やリウマチ治療薬の一部は抗炎症効果によりむしろ肺炎を軽減する傾向があると考えられ始めています（予防効果があるわけではありません）。しかし、まだはっきりとした結論は出ていませんので、感染者との接触が疑われる場合や、高熱が続く、息が苦しいなどの肺炎を疑う症状がある時には、行政の窓口やかかりつけ医に電話で相談をしましょう。もしも検査で陽性であった場合、内服や注射を続けるかは主治医に電話連絡して相談しましょう。

（今福信一）

### 研究実施機関（2020年8月時点）

